

# 仏教から見る 脳オルガノイド研究

第22回 日本再生医療学会総会  
「脳オルガノイド研究の倫理」

師 茂樹（花園大学）

# 第22回日本再生医療学会総会 師茂樹のCOI開示

- 演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はありません。

# 問題の所在①

- 科学技術における倫理的課題について、文化的多様性を配慮することが求められている
  - AI・ロボット（AIS）開発における仏教、儒教、ウブントゥ、神道などへの言及（IEEE 2019）
  - 「文化の盗用という懸念」「文化的多様性に配慮しているという口実」（神崎2019）
- 生命科学分野については「応用倫理学の議論に比べて、宗教学の議論が顕著に少ない」（澤井2019）
  - 脳死問題については、議論が盛んであった

## 問題の所在②

- 文化の多様性と（ある程度）普遍性のあるルールづくりには、宗教が大きな役割を果たす
  - 「……命とは何かというふうなことについては多様な文化があるけれど、それを大きなまとまりで考えていくと宗教伝統の影響が大きいし、共同の合意をつくっていくときには、その宗教伝統を参照することが助けになると思います。
  - 日本の場合には仏教とか神道とか儒教とかいろいろな宗教伝統がありますから、それを参照しながら日本人として納得できるルールづくりをやっていくと同時に、それが世界のルールづくりとどうかかわっていくかということを議論していく必要があります。」（島藺ほか2012）

# 仏教の生命（倫理）観①

- 衆生は傷つけるべきではない（不害； ahimsā）
- 衆生（有情）：「心」があるもの
  - 植物は含まない（日本では非生物もふくめて衆生とみなしていく）
  - 人間とそれ以外の衆生（動物など）は倫理的（被-）行為者としては同等
  - 「仏典では、動物の苦しみに関心を示す一方で、動物の本質を理解することにはほとんど関心が示されていない。」（Keown 2011）
- 脳オルガノイドや、そのもとになる幹細胞は衆生なのか？

# 仏教の生命（倫理）観②

- 生命＝心（識）の相続（流れ）
  - 「寿命と体温と識は 身体を捨てる時に同時に捨てる その身体が墓地に遺棄され 心がないのは木や石のようだ」（『雑阿含経』）
- 識（vijñāna） = 外界・内面の認識
  - 知覚、苦・楽等の価値判断、識別、継続性
  - 身体（感覚器官など）は必須ではない
- Cf. 脳死は死ではない

# 仏教の生命（倫理）観③

- 胎内五位

- 羯刺藍 (kalala) 受胎後7日 ←受精卵に心相続が入る
- 頰部曇 (arbuda) 受胎後8～14日
- 閉尸 (peśī) 受胎後15～21日
- 健南 (ghana) 受胎後22～28日
- 鉢羅奢佉 (praśākhā) 受胎後29～出産

- 胎内五位説は日本文化にも大きな影響

# 先行研究の見解

- 「仏教は、すべての胚が生氣を帯びているという見解に傾倒しているわけではない」が、「どの胚が生氣を帯びていて、どの胚がそうでないかを見分ける方法がない」
- 「仏教の立場から言えば、胚を破壊する実験は、生命の基本的な利益に対する直接的な攻撃であり、第一戒に違反するもの」
- 「人間の苦しみに対する同情や病気をなくしたいという願望に突き動かされた研究は、正当化されない」 (Keown 1995)



# 仏教の生命（倫理）観④

- 脳オルガノイドにも心相続は宿るか？
- 人工物にも生命（心相続）は宿り得る（かもしれない）
  - ダライ・ラマはコンピュータへの転生を否定しない
- 生命のようなものがあつたとして、それに識があるかどうかを外部から知ることは困難
  - 準-主体として見るほかない？

# 供養の文化

- アジアの文化／仏教だからといって、それにもとづかなければならないわけではない
  - 鯨供養、草木供養、実験動物慰霊祭など、日本の〇〇供養の背景に、自然と共生する日本のアニミズム的心性があると肯定的に評価されることもあるが…
  - 「こうした供養が現代日本で果たしている機能は、個人の私的活動を全面的に解放するための心理的・文化的装置であり、ひいてはそれが資本主義的企業経営を保証する心理的・文化的装置としても流用されている。」
  - 「人間が己れの生存のために自然資源を奪取し利用する行為を正当化するための文化的・思想的方法として、西洋近代の人間中心主義イデオロギーと日本式「供養の文化」の再構築との優劣を論ずるのなどは、無意味」（中村2001）

# 小結

- 胚の「破壊」をともなう実験は、アヒンサーに反するかもしれない
- ある程度発展したオルガノイドに、心相続が入ることは否定できない？
  - 「ぞんざいに扱う」べきではない？
- 人間のための医療の発展を理由にすることは難しい
  - 「供養」によって正当化することができるかもしれない

# 参考文献

- 神崎宣次 (2019). 「倫理って何?」: 人工知能研究者はどう考えているのか. *人工知能*, 34, 182-187.
- Damien Keown (1995). *Buddhism and Bioethics*. Palgrave Macmillan.
- Damien Keown (2011). “Buddhist Ethics: A Critique.” *Buddhism in the Modern World*. Routledge.
- 中村生雄 (2001). 祭祀と供儀: 日本人の自然観・動物観. 法蔵館.
- 澤井努 (2019). 科学と倫理・宗教: 幹細胞研究を糸口として. *現代宗教*2019, 179-205.
- 島菌進, 内山節, 佐々木宏幹 (2012). 鼎談 ノーベル賞受賞 iPS細胞が投げかけた人間の「生と死」のゆくえ: 宗教界はどこまで倫理上の疑問に答えられるか. *仏教企画通信*, 31. [https://www.bukkyo-kikaku.com/archive/bk\\_tusin\\_no31\\_2.htm](https://www.bukkyo-kikaku.com/archive/bk_tusin_no31_2.htm)